

平成28年度第2回防府市総合教育会議議事録

1 開催日時 平成28年11月22日(火曜日) 午後1時30分

2 開催場所 防府市役所1号館3階第1会議室

3 出席者

防府市長 松浦正人

防府市教育委員会

委員長 小松宗介

委員 清水智恵子

委員 鈴木隆子

委員 村田敦

教育長 杉山一茂

4 説明のために出席した者

学校教育課長 時乗順一郎

生涯学習課長 福江博文

子育て支援課長 梶山範雅

社会福祉課長 入江裕司

学校教育課主幹 柳井崇史

生涯学習課社会教育主事 神田橋芳幸

5 会議に従事した職員

教育部長 末吉正幸

教育総務課長 原田一幸

教育総務課長補佐 片山裕美

午後1時30分開会

○教育部長 ただ今から平成28年度第2回防府市総合教育会議を開催いたします。

はじめに市長から御挨拶をお願いします。

○市長 平素から教育委員の皆様には、本市の教育の充実について、大変お忙しい中にもかかわらず、多大なお力添えをいただいておりますことに改めて感謝申し上げる次第でございます。

限られた時間ではございますが、実りのある総合教育会議となりますようお願い申し上げます、冒頭の御挨拶といたします。

○教育部長 それでは、議事に入ります。

議長につきましては、防府市総合教育会議設置要綱第4条第1項の規定に基づき、市長にお願いいたします。

○市長 それでは、本日の議題でございます「家庭の教育力の向上について」を上程いたします。

10月に実施された教育再生実行会議の大きいテーマが、まさに今日のテーマである「家庭の教育力の向上と地域の教育力の向上について」というものでした。我々が平素から取り組んでいる事柄が教育再生実行会議でも大きく取り上げられていると受けとめているわけでございます。ここで意見集約できるものは、私も文科省、あるいは教育再生実行会議のメンバーに話をしたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは、現場について、お話をお伺いしていきたいと思っております。教育長いかがですか。

○教育長 子どもが変わってきている、よくそういう表現をされます。子どもが変わったという前提として、子どもを取り巻く社会、子どもたちが生活している環境が昔とは大きく変わって、少子化、あるいは情報化などがあるかと思っておりますが、そうしたところで、私どもは、学校の教育力の向上と家庭、地域との連携の強化という大きな目標を立てて、取り組みを進めています。

市長もよく御存じですが、学校は授業改善、先生方の指導も行っております。地域との連携では、平成24年度から全校をコミュニティ・スクールに指定し、地域での子どもたちの活動において指導に加わっていただくなど地域のお力をお借りしています。

そうしたところで、いろいろ取り組みを進めていますが、家庭の部分には、私どもの手が届いてないという事実がございます。

後で担当に説明させますが、調査結果で見ると、子どもたちが家で全く勉強しない、あるいは読書の時間がほとんどない、さらにはテレビあるいはゲームあるいはスマホなど、そういったものに何時間も費やすなどの問題が起きています。「家庭の教育力の向上と地域の教育力の向上」が教育再生実行会議の次の大きな課題になっているようですが、私どももそれに先立って、身近なものから手を打てるものがあるのではないかという気持ちがあります。

それでは、具体的な現状につきまして、担当から説明させます。

○学校教育課長 それでは、家庭の教育力ということについて、御説明します。学校現場で家庭の教育力についてどのように感じているかということについて校長にインタビューした結果も含めて御説明いたします。

まず、家庭の教育力とは何かということ、この定義になるかどうか分かりませんが、基本的な生活習慣、生活能力、自制心、自立心、豊かな情操、他人に対する思いやり、善悪の判断、基本的な倫理観、社会的なマナーなどの基礎を子どもたちに育むこと。その教育の出発点が家庭であり、そういう力をつけることができるのが家庭の教育力と捉えてお話をさせていただきたいと思います。

子供たちの現状ですが、お手元に全国の学習状況調査からの資料をお配りしております。例えば家庭の様子ということで、平日3時間以上、テレビ、ビデオ、DVDを見ている子供が、小学生は約3人に1人、中学生は約5人に1人という状況で、この裏側には、親もそのような状況にあるのではないかと考えられます。

また、学校では全校一斉読書を実施していますが、平日家庭で全く読書をしないという子どもが、中学生においては約3人に1人いるという現状がございます。

それ以外に、基本的な生活習慣が身につけていない、あるいは親が過保護過ぎて子どもの頑張ろうという気持ちを抑えてしまっているのではないかと、子ども自身すぐ諦める、夢を語れない子どもが増えてきているということがございます。

まず1つ目の視点は、いわゆる貧困家庭の問題です。最近いろいろ話題になっておりますが、虐待、ネグレクト、朝御飯を作らない、場合によっては、不登校傾向の子どもを先生が迎えに行くと、親も一緒に寝ている、家で勉強しようにも勉強する場所がない、洗濯を何日もしてもらっていない服を着てきている子どもがいるなど、そのようなことがございます。

教育委員会としては、そういう家庭には、SSW、問題行動対策チーム、あるいはケース会議等々でかかわっております。また、先ほど教育長が申しましたコミュニティ・スクールによる取り組み、学習支援、県が進めようとしております家庭教育支援チームなど、そういう取り組みをしているところでございます。

本市においては、小学生の医療費が無料化、就学援助、始まったばかりの子ども食堂などの対応がございます。

また、貧困家庭とは言えないものの、適切な教育がなされていない家庭があり、いろいろなことを学校から聞き取ったわけですが、見ていただくと、家庭が安らぎの場になっていないのではないかと、親の愛情で子どもの心を育てることができていないのではないかと、あるいは人とかかわる経験をさせていないのではないかなどの感想がありました。ちょっと雨が降ったらすぐに迎えに来るなど過保護となっている。さらに、欲しがればすぐ物を買って与える、礼儀、マナー等ができていないなどの気付きがありました。

資料に、「子どもの世界や子ども時代の剥奪」と記載していますが、これはある校長先生から、子どもには子どもの世界があるが、よく言われる子どもの喧嘩に親が出るという状態が結構多く、

子どもたちが自分たちの力で物事を解決していこうとするときに、親が出てくることにより問題がさらにこじれ、子供はつらい思いをする。自分たちで何とか解決していく力をつけていないというようなこともあると言われました。

それから、これも学校からの声ですが、親と一緒に子どもの将来について考えるために、学校に来ていただきたいのに、幾ら呼んでも来られない。学校の宿題で音読がありますが、親が音読を聞いてくれない。授業参観に来ているのに、親が廊下でスマホをいじっている、ガムをかんでいる、あるいは私語をしているなどがあるようです。入学式の式辞を校長が言おうといったときに、生徒は静かにしているのに、親が私語をやめず式辞が始められないなどの事例があります。また、親が子どもの話を100%信用するということにより困ることもあるようです。例えば昔は先生に叱られたと言うと、それは子どもも悪いのではないかということになっていたことが、子どもの話だけを100%信用し、うちの子に限ってということが増えてきている。あと、学校に支払うべきお金を支払わない、学校の文句を子供の前で言う。これは、学校との関係をだめにする最も手っ取り早い方法ですが、そういうことがあると聞いています。

それから、学校のきまりは当然守るべきものですが、破ることについても平気であり、親がなぜいけないのかと説明を求めるといったことがあります。夜外出する子供に対して、無関心である。さらに、子供と一緒に深夜までゲームをしている、居酒屋、カラオケに連れていっている、SNSで噂を流す、写真や映像を投稿するというようなことがあります。これは親が興味本位で行うこともあり、私の卒業式の動画がユーチューブにアップされていたということもあります。そのようなことが今は起こっているということです。

学校は、家庭訪問をしたり、保護者会を開いたり、PTA総会で語ったり、あるいは学校運営協議会、講演会や研修会を開催するなど一生懸命やっております。しかし、家庭には家庭の教育方針があって、なかなか踏み込めないところがあります。うちの教育方針だからと言われたときに、もう一步学校は踏み込めていない。

それから、保護者を指導する者、保護者を指導する場がなくなっているのではないかとも思われます。ある校長先生からの意見で、子どもを育てることによって、子どもが親を教育していくことになるというものがありました。最近は何もかもが学校に来ており、学校、家庭、地域それぞれの役割分担の幅が変わってきているのではないかという課題を感じております。そういう現状ですが、子どもたちの夢の実現に向けて、学校では授業改善を実施しています。最近言われておりますアクティブラーニング、専門的な人が学校を支援するチーム学校の実施、あるいは体験活動をさせる中で子どもたちを育てていかなければいけないと感じているところでございます。

これは提案ですが、家庭でテレビやゲーム、ネットやスマホの使い方など親がコントロールできていないのであれば、市全体を挙げて使い方等指導する取組を行ったらどうでしょうか。子育て

て講演やワークショップなど、そういう機会を増やしたらどうだろうか、小学校に入る前の子育てに関する相談体制をさらに充実させたらどうだろうかというような提案も現場の校長からは出てきております。

ただ、今お話しした家庭の教育力の低下は、全ての家庭で起こっていることではなく、ほとんどの家庭はしっかりしているということを踏まえて、気になる部分について説明をいたしました。

以上でございます。

○市長 何か感想はありませんか。どうぞ。

○委員長 私は教育委員になる前に、市長さんと車中で話す機会があり、家庭教育、学校教育、社会教育の話をしたことがあります。そのときに、この家庭教育の話題になり、今の親は、学校に来てくれといっても来ない、PTAの会に学校が呼んでも来ない。来ても、全く話を聞いていない。たまたま話ができたとしても、先ほど課長さんがおっしゃいましたが、自分の家は自分の家庭の流儀があるということで、取り合わない。しかし、学校には学校の教育があり、家庭教育というのはどうしたらいいのかという話をしました。

その後に教育委員となり、8年経過しましたが、それにもかかわらず、同じような問題を今でも抱えている。また、問題点は幾つもある中で、学校の先生方は一生懸命努力をされて、頑張っていると思います。

先生方は本当に多忙で、その中でさらなる努力をしていかなければならない。言ってみれば、学校の先生は、今からさらなる努力をしようとして続けて、自分自身が追い込まれていき、良い先生ほどつぶれてしまうのではないかと危惧しています。

だから、行政でできること、教育委員会も行政の一つですが、お金で解決できるもの、人的な支援を投入することによって解決できるものの2つあるとは思いますが、どこまでやっていくのかということは、恐らく市長さんの考え一つで大きく変わっていくのではないかと、私は思っています。毎回この会議に出る度に、市長さんから、教育再生首長会議の話、またそれが今どのように進行しているのかという話を聞きたいと思っております。また後ほどその話も聞きたいと思いますが、今日はぜひ、高知で行われた研究会に出席された鈴木委員からもお話をお聞きしたいと思っています。

○市長 では、清水委員、いかがですか。

○清水委員 保護者の立場として、恥ずかしいという気持ちのほうが大きく、中には私も当てはまる場所があります。また、学校が本当に頑張っている様子がとてもよくわかりますし、子どもを育てることで親を育てるという、今はそういう時代なのかとつくづく感じてしまうところが、とても情けなく感じます。親として何をして子どもたちを成長させるのか。今PTAとしても一番大きな課題で、どのようにして保護者たちを講演会や保護者会に参加させるのか、聞いてほし

いはなかなか集まってくれないため、そこをどう改善していくかが今後の私たちの課題であると感じます。

○市長 村田委員、いかがですか。

○村田委員 家庭の教育力の向上と一緒に、いろいろな大きな問題を含んでいて、教育委員会の中だけでは解決できない問題だろうと思いますが、今の説明を受けまして、非常にわかりやすかったと思います。どういう問題があって、今後何を解決しなければいけないか、あるいは今どういう努力がなされているかが非常にわかりやすかったと思います。確かに子どもにいい教育を与える上で、どうしても学校側が家庭に少し踏み込んでいかなければいけないという状況はあるかもしれませんが、そこまで全部カバーするというのは無理だろうと思います。家庭に問題があって、十分支えてあげることができない子どもたちに学校現場がどういう施策をするか、その子どもにどのように手を差し伸べるか、学校として何ができるかということを整理して、教育委員会としてそれを中心に進めていくことが大切だろうと思います。

確かに親を変えていくということは大切かもしれませんが、子ども自身の一生です。子ども自身に将来何が大切であるか、どうすればいいのかということを理解してもらうことによって、親を教育するというよりも、子ども自身がしっかりと意識を持つような形に持っていくことが一番大切だろうと思います。

家庭の経済的な問題だろうが、あるいは親のいろいろな問題であろうが、そういったものを全て含めて、子どもは自分の人生だから、それを豊かにしていく、楽しく実りあるものにしていくように、それが一番大切だということを理解させることが学校の責任ではないかと思います。

○市長 鈴木委員いかがでしょう。

○鈴木委員 私は、学校、家庭、地域の役割分担というところへもう一度戻らなければ、家庭の教育力を高めていくこともできないのではないかと思います。

大変難しいたくさん課題がありますが、学校の教育力と家庭の教育力と地域の教育力を同時進行で考えていかなければいけないのではないかと先ほどの御説明の中で感じました。例えば3者に共通するものは、人を育てること、一人ひとりの個人を育てる、一人ひとりの日本人を育てる、この目標は同じですが、そしてその目標の達成のために、今日本の教育は、「生きる力」を育むというのがキーワードだと思います。それは家庭、学校、地域の中で、それぞれ担うべき役割が違うのではないかと思います。

例えば学校は生きる力を育てる中で、2つの大きな役割があると思っています。一つは、生きる力の理念というのは三つあるわけですが、その理念の一つの確かな学力、学力の保障、これは学校の命題だと思います。二つ目は、学校というところは、集団の力をてこにして社会性などを育む場所であって、集団の力をてこにしなれば、学校教育はやっていけないのではないかと思

います。どんな子どもを育てたいのかという目標は同じでも、それぞれ家庭と地域と学校は担うべき役割と方法論が違うと思います。

今、文科省が、「どんな子どもを育てたいのかという目標の明確化」ということを言っておりますが、私は、それは一つの段階であって、やはり一人ひとりの子どもに目標を設定していかなければいけない。例えばいじめや差別問題ひとつにしても、人が差別されているのを見ている傍観者もいれば、自分が差別されたら差別に負けてしまう子もいれば、自分が人を差別する子もいれば、自分が自分を差別している子もいます。つけてやらなければいけない力は違うと思います。そういうことを考えたときに、1人ずつの子どもの育てたい力の目標を明確化するということが大事ではないかと思っております。

役割分担の中で、ボーダーレスということは大事だとは思いますが、全てが一緒になっていないかという反省が必要ではないかと思っております。学校で箸の持ち方を指導する、学校で排便指導をする、大学生でも、朝食をとっていない学生には学校が朝食を出すなど、学校へ何もかも持ち込まれているように感じます。ある新聞記事に「学校の役割を考えよう」という特集がありましたが、その中で、「何もかも持ち込まれた学校はパンク寸前になっている」とありました。まさにそういう状態になっているのではないかと感じております。

日本の先生方が、世界中の調査で一番多忙である。また多忙と感じている先生は9割近いという指摘がありますが、そのあたりを行政でどのように取り組んでいくかということも課題ではないかと思っております。

先程御説明のありました憂うべき状態は、防府市だけの問題ではなく、全国的な風潮で、個人の力や一教育委員会の力ではどうしようもないところに来ているように思います。全国的風潮から見れば防府市の状況は良い方だと思っております。行政として、先生方あるいは学校をどう支えていくかということ、役割分担という観点から見直していかなければならないのではないかと思います。

○市長 ありがとうございます。今日は、家庭の教育力の向上に向けてできることはどんなことだろうかというようなことでの議論を展開する中から、何か方向性が出れば、それに越したことはないと思っております。

私としては、社会全体、日本国全体の風潮として、そういうような運動が行われるような環境づくりを社会全体で、しかも継続的に大々的に行うことが必要ではないかと考えています。その姿勢が、やがてはだめになりそうな家庭をだめにならないようにしていただくとか、だめになっている家庭を目覚めさせるとかというようなことにもつながっていくのではないかと思います。対処療法的にやることももちろん大事ですが、全体把握をしっかりとする必要があります。家庭・学校・地域ということさえ超えた、それらも包含している社会全体の空気づくりをしていくことが

求められているのではないかという気がします。

私の孫が今9人おりまして、9人が、小学校6年生、5年生、4年生、3年生、1年生、年中、年少、それから2歳、1歳で、同学年が1人もいません。間近で孫を見ながら、教育というものについて考えさせられる時間がたくさんあります。そうして見ていると、一家庭の問題だけではない、一学校だけの問題でもないさらには防府だけの問題でもないと思います。特にマスメディアの果たす役割というものは大きいと感じます。

よくテレビ局が、花壇を整備したり、きれいな樹木を植えたりする団体を表彰したり、いろいろなキャンペーンを行っています。そういったことを教育に向けてくれるような働きかけもしてみる必要があるのではないかと考えております。

○教育長 本市では緑化推進委員会が緑化ポスターコンクールと花壇コンクールを行っており、子どもたちの学校の花壇が表彰されております。それも子どもたちの心を耕す情操教育につながってくると思います。

「防府市の学校教育」という冊子の中に、潤いのある落ち着いた学校にするための7つのアクションというものがあ、り、その中の一つに『教室や校庭が「花」であふれる学校』というものがあ、ります。

それは花壇のような土からの花づくりもありますし、教室に花を置くということもある。どちらにしてもその子どもたちの心を本当に潤してくれる。花が置いてあれば、騒いでそれひっくり返したら花が傷むということで、子どもたちも教室で騒がなくなったり、廊下を走らなくなったりなど、とてもいい雰囲気をつくり出してくれる、花はそういう力があると思います。あと7つのアクションには、笑顔、挨拶、読書、合唱、清掃、ボランティアという項目があります。学校はこれを、本当に根気強く計画的に取り組んでいます。

ポスターコンクールと花壇コンクールは、子どもたちの励みにもなっていると思いますし、学校生活においては大事なことです。それは長い目で見る上では、子どもたちの生活も潤い、さらにはそれが家庭の生活にも少しは良い影響を与えてくれるのではないかと期待しています。土に触れながら花を育てるということで確実に子どもたちの心が育ち変容してくる。そういったことにより、子どもたちの変わる様子を見てきており、今多くの学校にそういうものを取り入れています。

○市長 学校において、その教育をしている、施していくということについては、精いっぱいやっておられると思います。むしろ、清水委員、課長さんのお話の中にもありましたが、例えば運動会でも、児童代表が挨拶をしていたり、校長先生が御挨拶されているのに、その後ろで素知らぬ顔でおしゃべりしている保護者がいる。脱帽、起立をされて、国歌を歌ってくださいと子供がけなげに言っても、素知らぬ顔をしている方もいます。やはり皆がそういうようなことに無関心で

あつてはいけない。ちょっとサインを送るとか、ちょっと目配りをするなどお互いが注意することが必要なのではないのでしょうか。

私が主催している教育再生首長会議は、まさに有志市長の集まりです。ですから、我々がテーマを決めて開催します。つい2、3日前は、志教育について、NPO法人「志教育プロジェクト」を推進しておられる先生方2人がお見えになって、指導されました。そのときは全国市長会の会長の仕事があり、私はどうしてもその勉強会そのものには出られませんでした。

その前は、ママ育協会というお母さんたちを教育する協会がありますが（山口県では宇部市）、そのママ育協会のかがみ理事長に来ていただきました。そこで、かがみ理事長から、母親の一言、これがとても大事だというお話がありました。そこで我々6、70人の市長が忘れられない母の一言を提供して欲しいという宿題をもらいました。150人中約80人の市長から返事があったとのことで、とても喜んでおられました。

その方がおっしゃるのには、市長さんたちのような立派な人間を育てるには、やはり母の教育、母の力が大きいのではないかと。そのお母さんがどんな教育をされてきたかを知りたいというような切り口から、そういう投げかけをいただきました。教育再生首長会議でははそういう話ばかりしています。以前はコミュニティ・スクールの権威である貝ノ瀬先生にも講師に来ていただきました。1年に4、5回、勉強会を行っています。

まず、家庭の教育力というのを高めるには、その家庭を構成しているであろう父親と母親がしっかりした観念を持たなければどうしようもない。その父親と母親にしっかりした観念をどうやって植えつけさせるかと言ったら、社会全体の規律、規範等々の中や日常会話の中から解らしめるしか方法はないのではないのでしょうか。

養育が十分でない家庭に対して、学校現場からピンポイントで教育できないのでしょうか。学校の先生方から保護者に対して、子供を預かっている担任として子どもがおなかを減らして、洗濯もしていないような服を着て来るようなことは看過できません、などとは言えないのですか。学校教育課長いかがですか。

○学校教育課長 それはもちろん言っていますが、聞いてもらえない。指導力がないと言われればそれまでかもしれません。

○市長 養育の義務の放棄ではないですか。

○学校教育課長 きちんと御飯を食べさせてくださいと言いますし、洗濯してなかったらにおいがして、いじめられるかもしれませんよ、洗濯してあげてくださいと言いますがしない。だからどうするかというと、先生が洗濯する。自分が弁当を2つ持ってきて食べさせたりするという光景を私は何回も見ています。しかし、市長さんのお話を聞くと、それを学校が行うと、ますます家はやらなくなるのではないかとも思います。

- 教育長 本日の資料によると、朝食を毎日食べている児童生徒の割合が、小学校93.5%、中学校96.2%となっており、私はかなり全国平均より高いのではないかと思います。
- 市長 そうですね。高いということは、少ない人たちを導いていきやすいのではないですか。
- 教育長 今は授業等の中で、子どもたちが自ら朝御飯を作って食べることができるよう、すぐできる朝御飯のメニューやレシピを教えることを取り入れています。それによって、先ほども子どもを教育することによって親をしつけるのではないですが、子どもが食事を作る、そしてそれを見て、親がやはり食べることは必要なんだと、逆ではありますが、そうすることによって、いわゆる家庭の力をつけることも考えています。
- 市長 全寮制の学校があったらいいですね。その寮では、そこで寝泊りするから当然御飯も食べる。洗濯もできるわけです。自分で布団を敷いて畳んで、そういうことはできないんですか。
- 教育長 私は公立の学校では聞いたことがありません。
- 市長 そうしたら問題解決です。こういうのが用意されていますから、お母さん、子どもさんにこちらでまともに生活をさせましようと言えます。
- 学校教育課長 極端にネグレクト、明らかにこの家に置いておくのは危険だと言う場合には緊急一時保護はします。
- 市長 あるいは海北園などもあります。そういうものではなく寮のようなものです。特認校の寮制度にしたらいいですね。
- 委員長 やはり親が教育を放棄するわけですから、その放棄された子どもに対して、それらのことをするのは非常にいいとは思いますが、親の子どもを育てる義務と責任はどうなるのでしょうか。
- 市長 それを放棄したということによって、隔離するわけです。
- 委員長 隔離するのもいいが、そうすると費用の問題も発生してきます。ですから、最初に私も言った、市長の判断で、こういうふうにしようと決定できること、また教育委員会で先生方に指示してできることを分けて考えなければいけないと思います。一緒にすると、先ほどからいろいろ話をしているものが、また最初に戻ってしまいます。
- 市長 行きつ戻りつするわけですが、家庭の教育力の向上というものを我々が議論するからには、行きつ戻りつはやむを得ないと思います。
- 委員長 問題はどのように教育機会を損失している子どもたちをいかに助けるかということです。家庭の形態の状況に左右されない教育が必要ということです。
- 市長 それで就学援助のように最低限のことはしているわけです。
- 委員長 例えば子ども手当とかいうのがあるとして、それが子どものために使われず、親が使ってしまったというようなことが行われるのであれば、修学旅行等の費用については貧困家庭

を補助するのではなく全員に公平に手当ですると良いと思います。今日のテーマは大きいため教育委員だけで協議するものではなく、社会教育委員や民生委員など、家庭にかかわる方や、社会にかかわる方と一緒に話し合うべき問題であると思います。今実行しているものと、そしてこれから実行しなければいけないこと、またすぐに実行できるものと、時間をかけてじっくりと熟成していくものと分けなければいけないと思います。

こういう問題がここに出てきたということは非常にいいことであり、今私たちにできることが何かということを一つずつ考えていき、その中で私たちが教育委員として市長さんにどんなことをお願いしたらいいのか、また学校の先生方、学校教育課の課長にどんなことを言えばいいのか、生涯学習課の課長に何を提言すればいいのかなど、いろいろ考えていかなければいけないという第一歩になったのではないかと考えます。

○市長 この問題は、一朝一夕に結論が出る問題ではないし、方向性も出る問題でもない。冒頭私が申しあげましたように、社会全体の大きい問題として、ある正しい方向に認識が行くように、大々的にキャンペーンをやっていかなければならないと思います。

○教育長 戦後、子育てに関してもいろいろなメソッドが取りざたされて、あれが良いのではないかとすると皆がそれに向かう。これがいいということこれに向かうということを行ってきました。しかしその中で、いろいろ淘汰されて今残っているものが良いものではないか。ぜひそういう世論をしっかり作っていくことが大切です。そういう中で、家庭のことだけでなく、社会的な要因が影響して、子供たちが家庭生活の中で苦しんでいる問題に対して、行政、教育委員会として手が差し伸べられるものに手をつけていくという段階ではないかと思えます。

○村田委員 わかりやすいもので言えば、例えば家庭での教育環境を整えることについて、スマホを9時以降は使用しないということを言っていますが、徹底されていません。1つだけでもしっかりと取り組むということすればそれはそれだけでも変わってくると思います。

○市長 スマホや携帯は、小学校6年生までは持たせない。持たせる特殊事情があり学校長の許可を得て持たせるような制度になれば良い。

我が家では、中学校卒業するまで持たせないと言っています。友達が持っているなどの切り返しがあれば、よほどのことがない限りは携帯、スマホを持ってはならんとテレビでも言っていると良い。

○委員長 昨年のPTAとの懇談会で、そこに出席されているPTAの会長もしくは副会長に準ずる方への質問では、ほとんどの方が子どもには持たせていらっしゃいませんでした。しかも9時以降は使用しないということも決めて、パンフレットを作成され各家庭へ配付されている。それでも実行しない家庭があり、その家庭に対して、どのようにアプローチしていき、それを実行させるかが問題です。

いけないと言うと、わかっているということは言われるが、持たせることが楽であるため安易な方に流れてしまっており、その問題がいつまでたっても解決できないというところがある。そこで、少なくとも義務教育の間当市はスマホを持たせないという制度化を、行政でできたらいいと思います。

○村田委員 基本的にはモラルに関する問題というのは、一つひとつの家を攻撃したり指導したりするというよりも、社会全体としてそういうものをつくり上げていくことが、時間はかかるかもしれないが、一番確実なものだと思います。

○委員長 実際10年前はスマホなんてなかったわけです。そのときにどんな問題が起きていたのか、また、スマホを持たせることによって、どのような問題が解決したのか、またよくなったのか、また弊害があるとしたら、その弊害等を調査しよし悪しを検討していくことが必要ではないでしょうか。

○市長 60年前はテレビがなかった。だから、私たちは幸せだった。私はいつも小学校行って「私が子供のころはテレビなんてなかった。だから幸せだった。君らは可愛そうだ。テレビがないことでどうやったら身を守るか考えないだろう。」とっています。

そうすると子どもから手紙が来て、「そういうふう（あまりテレビを見ない）にしようと思います。」などと書いてきます。だから私は、「それを実行し続けることが大切です。」と返事を書きます。

あらゆる機会に子供たちにまともなことを聞かせてやるということはとても大事だし、親たちにもまともなことを聞かせることは必要です。それを教育委員やPTA会長が行うのではなく、メディアの力を借りるなどして世論づくりをすることが大事です。

○委員長 政府が主導すればかなりの確率でできるかとは思いますが。

○市長 ただし書きを入れたらいい。特殊事情のある方は校長にお話の上許可を得ること、それを入れればいいのです。

○委員長 本当に必要な場合については学校と家庭にしかわからないことはあるが、いろいろなことをやればできると思います。ただしそれは経済に関わってくるから、なかなか簡単にできないかもしれません。

○教育長 スピード制限を守らないといけないと教育の場で繰り返し言うように、携帯、スマホについても教育の場で9時以降使用してはいけないと言わなければならない。

○市長 9時まで使用してはいけません。9時になったら消灯ですよ。

話は変わりますが、先日福島第一原発に視察に行ってきました。郡山から3時間程度のところに作業をする人たちのための基地となるサッカービレッジがあります。ここで着替えて、それからバスに乗って、福島第一原発に入り込んでいく。そこまで行くのに、また4、50分かかりま

す。

そこでは約6千人の方が働いているということでしたが、防護服を着られていた方は数えるほどしかいないのです。マスクもあまりつけず普通どおりの帽子をかぶり普通どおり暑い人は半袖で作業していました。私たちは4時間おりましたが、そこで被爆した量は、歯のレントゲン写真の1回分です。だから、人体に何の影響もありません。

そこでは年間約6千億円使っているのではないかと考えています。1日に6千人が働いているということは、仮に一日の賃金が1人1万円であったとしても、1日が6千万円になる。もちろんいろいろあるから、1億ぐらいは最低限かかるだろうと考えられる。それで、250日間働いていたら、250億円。そういうふうに考えて、その中に機械を入れたり、凍らせるための壁を作ったりしている。そうしたら、今そこでは、年間数千億円かかっているでしょう。1兆円まではいかないかもしれないが、国家予算の200分の1がそこへ投入されているという現実を、国民はほとんど知りません。

恐るべきことが今起こっている。現実には、40年続くか、50年続くかわからなことに、何千億というお金が投入されている。それがずっと深く静かに進行しているわけです。

作業現場の中を行くと、全国の子どもたちから原発で働くおじさんたちへ、体に気をつけてくださいとか、ありがとうございますとか、電気を大事にしますなどの激励の手紙が貼ってある。それをその方たちは見ながら、元気いっぱい、モチベーションを高めながら頑張っている。そういう現実をやっぱり知らせる必要があります。余談でございましたが、なかなか話す機会がないのでお話をしました。

○鈴木委員 学力調査で高い水準を維持している秋田県が新たに打ち出した『わか杉七つの「はぐくみ」』は、早寝早起き朝御飯など生活リズムが全ての基本であるというものです。これを教育委員会が作成し、教育委員会が広めていますが、少し違和感を持ちました。こういうことこそ、PTA連合会が発信元になればよいのではないのでしょうか。先ほどからのお話の幾つかが、行政主導ではなく、PTA連合会からの発信で考えられないかと思います。PTA自らの発信を今後の課題にさせていただけたらと思います。

○委員長 最初に言いましたが、とにかく問題になるのは出てこない親です。

○市長 それはとても少人数のことでしょう。

○委員長 少人数ですがその少人数が問題となっているのです。モンスターペアレントというのも恐らく少人数だと思います。学校で問題を起こす先生も少人数ですが、マスコミの書き方で、さも先生方がみんなそうなのではないかという意識を持たれてしまう。言論の自由という社会の中で、報道され、マスコミにも登場していくわけです。だから、この少人数をどうしたらいいかというところで悩んでらっしゃるのが学校の先生方です。

私たちが今考えなければならないのは一部の人たちをどのように持っていくべきか、その方向性をきちんと定めて、全体の教育を上げていく、また、まじめに勉強している子供たちを下げさせないようにしていくということが、先生方が一番苦勞されているところではないかと思えます。

○教育長 教育行政だけではなく、市長部局を含めて、民間のいろいろな方との協力をするによって、そうしたところへアプローチできるものであると思います。先ほどマスコミにも働きかけて、マスコミからしっかり言ってもらったらいいいということもありましたので、そういったところにもお願いしながら、今できることを実行していきたいと思えますので、市長ぜひよろしくお願ひします。

○市長 大きな課題であり、最大の課題です。日本に今一番大事なことは教育です。教育の再生です。これを取り戻していかない限り、日本の再生はない。本当にそう思えます。

時間もかけてまいりましたが、冒頭に申し上げましたように、家庭の教育力の向上について、幾ら議論しても、ここで一定の方向性や結論が出るものではないと思えます。ただし、あらゆる場面において常に議論をしておかなければならない課題だと思っております。

そのほか、何か御意見をいただければ、いかがでしょうか。なければ事務局へお返しします。

○教育部長 御協議ありがとうございました。これをもちまして、第2回防府市総合教育会議を終了したいと思います。長時間ありがとうございました。

午後2時50分閉会